

がつ ぎょうじよてい  
6月 行事予定

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

【お知らせ】

- ふれあい料理教室 (第1回) 6月12日(金) 10時00分～
- ふれあい喫茶 (第3回) 6月18日(木) 9時30分～

悩んでいることはありませんか？

隣保館は、いつでも人権に関わる悩みを相談できる窓口です。  
「職場でのハラスメント」「職場や学校に行けない」など何でも相談してください。  
また、ハローワークの職業相談は、電話による予約制となっています。

りんぽかん  
かわのえ隣保館だより

2026年(令和8年)6月発行号 電話/FAX 0896-28-6254

プライバシーと人権侵害

「プライバシー権」とは、他人に知らせたくない個人の情報や私生活上の自由を他人から干渉されない権利で、「プライバシー権」の目的は個人の保護です。マスメディアで個人の情報を公にすると、プライバシーの侵害にあたりますが、最近「プライバシー権」より「表現の自由」や「知る権利」が優先されるケースが増えています。よく見かける例としては、政治家(公人)芸能人(準公人)などの報道・SNS・雑誌による私生活の暴露です。公人(準公人)の場合は公益性(社会にとって知る価値があるかどうか)があると判断されて、「知る権利」が優先され、プライバシーに関わる情報も掲載されることがあります。もちろん事件性のある場合など公開することで、公益性に対する貢献という意味合いがあれば、それが必要であると理解できます。しかし、近年多いのは、著名人の不貞行為など、社会的な問題ではなく、本来は個人間の問題が、公人であるがゆえに話題に上がっていることです。ただ、最近ふと疑問に思うのですが、個人の行為が公開され、社会的信用性や名誉も傷付けられ、なおかつそれについて詳細の説明や謝罪までする必要があるのでしょうか？不適切な行動などを肯定するわけではありませんが本来は相手との話で解決すべきで、オープンにすることで相手にもデメリットを被る可能性があるのに、公開する側はその責任を問われないというのはどうでしょうか？

やはり、公人(準公人)であろうと、手当たり次第に情報を公開することが許されるわけではなく、記事の内容如何では名誉棄損・プライバシーの侵害となり、それが人権侵害につながっていくケースも多くあります。例えば出自や思想信条・性的指向など自身のプライベートな情報まで暴くことは、プライバシー侵害となり、情報の公開により、偏見や批判の対象になることもあり得ますし、差別の原因にもなりかねません。

しかし、現在明確に差別を禁止する法律がないために、あくまでも「プライバシーの侵害」として扱われてしまいます。法律の後ろ盾がなく、直接的に差別の解消につながる明確な道筋がありません。そのため、差別の加害者もその差別意識が薄く、情報を受け取る側も、自分には関係ないと、どこか他人事のように感じているのではないのでしょうか。

差別解消のためには、何よりも啓発の力が大事です。私は研修などに積極的に参加する中で、自分の差別心に気づくこと、身近で起こる差別にもいち早く行動することを意識して、正しい知識を学んでいます。学習を重ねて差別を自分の事として考えるようになれば、自然と差別に立ち向かうための力も備わります。多くの方が同じ方向を見て差別に立ち向かっていけば、やがてそれが大きな力になり、あらゆる差別の解消に向かうと私は思います。

# プライド月間

6月は世界的に「プライド月間」として、LGBTコミュニティの権利や尊厳を啓発するイベントやパレードが開催されます。性的マイノリティの権利を訴える運動の象徴としてレインボーフラッグが用いられます。旗の6色には赤・橙・黄・緑・青・紫があり、「命・癒し・太陽・自然・芸術・調和」という意味が込められています。日本でも、2023年6月に「LGBT理解増進法」が施行されて、3年が経過しようとしています。成立前後にはLGBTに関わる事案が注目され、世間の関心事でした。また、同性の婚姻を認めないとする現行法は「違憲」との判決が多数出て、世の中が性的マイノリティの理解へと進むいい流れがありました。

しかし、未だに具体的な法律は制定されていません。この理解増進法はそもそも理念法で、世の中の理解を深めていこうという意味合いでしかなく、法律の制定における議論も「国民的理解が深まっていない。」という理由で、いつも跳ね返されているような印象を持ちます。そもそもマジョリティ側の人にとって、自分たち以外のマイノリティに対する意識が低いようにも感じて、その人たちも含めた理解の深度ということなので、ハードルが高いように感じます。世の中に多様な人たちがいる中で、それぞれの問題を解消するために、立場を共有しながら一緒に法制化への働きかけが出来ていけば、個々に抱える問題もクリアできて、そこに生まれていた差別もなくなっていたと思います。

しかし、問題が解決せずに、それぞれ別問題として当事者のみが声を上げているという状況が変わらないということは、多くの方が自分には直接は関わらない問題には無関心で、そっとしておいてもそのうちなくなるだろうと他人事のように「寝た子を起こすな」という考えを持つ人が多いのではないのでしょうか。言葉では「差別はいけないし、一人ひとりの個性を認め合おう」と言っても、自分の周りで直接関わらない限りは、本気でそのことに当事者と一緒に立ち向かう人は少ないのだと思います。

当事者が勇気をふり絞って「カミングアウト」とすると、誹謗中傷や見ず知らずの他人からの差別に晒される可能性があります。自分と直接は関係ないという人は、差別を他人事のように捉えているはずなのに、自分が客観的に見えているような気で、評価している人がいますが、それが差別につながる基になっているような気がします。何気なく他人事として客観的に発言しているつもりかもしれませんが、そのことで当事者が気持ちを左右されて、心が辛くなることもあります。

逆に言えば、当事者や当事者の気持ちに寄り添う側であれば、そういう発言は出てこないように思います。人は誰しもマジョリティな面もあれば、マイノリティの面もあるので、LGBTの問題では当事者でなくても、他の問題では、差別を受ける側になる可能性はあります。

まず大切なのは、すべての人権問題はつながっているという意識を常に持ち続けて、あらゆる差別を自分たちの問題として捉えることだと思います。差別をなくす側に立ち続けるためには、すべての事に無関心では相手の立場に立ちきれません。普段から全方向に向けてしっかりとアンテナを張って、意識を持ち続けることが大事です。私は差別をなくす側としてあらゆる問題に関わりたいと思い、反差別の思いを持ちながら、物事を見つめています。一人の力は微力かもしれませんが、それがやがて同じ思いの仲間とつながっていき、差別をなくす大きな輪となると信じています。



しゅじ 主事  
にしかわなおき 西川直輝

# AIと人権

最近、AIは国内外で目覚ましい発展を遂げて、様々な分野で取り入れられています。仕事などで作業の効率化に使われることで、人間に取って代わるという時代になりつつあります。データを基に最適化された動きや情報を書くスピードは人が行うことに比べて、何倍も速く行えて、その意味では大いに利便性はあります。AIロボットなどでの学習能力による行動の反復での対応の多様性は、昔の単純な反復とは明らかに違ってきています。毎回学習しながら、その動きは常にアップデートされて、様々な分野で実用化されています。現にAIを使った車の自動運転などの技術も進化しています。

しかし、人間でなければ感じ取れない微妙なニュアンスをどのように汲み取り、軽微な軌道修正がどこまで可能かなど疑問はゼロとは言えません。瞬時に最適化された回答を導き出す能力や話す内容など正確に記憶することは可能ですが、話し手の表情や癖などはパターン化された膨大なデータを読み込んでいても、人それぞれ千差万別な表現を上手く取り込めないこともあるかもしれません。

例えば人が人を評価するようなストレスのかかる部門にAIを適用できそうですが、その人のバックボーンや人間性など、情報だけではニュアンスが伝わりきらないこともあると思います。また、その収集したデータの中に不平等や格差などバイアスが折り込まれていれば、AIはそのまま再現して、データに潜むバイアスに伴う差別の恐れもあります。人は間違いや失敗から学んでいくこともありますが、AIはその人間のような迷いはありません。人間的な寄り道がないことで、人間らしさでうまく回っていたことが、軋轢を生むことも予想されます。感情がないか、あるいは作られたものであるため、人によってはどこか懐疑的になり、行動の正確性はありつつも、感情を伴わないため感情移入できず、お互いの心に隙間ができて信頼感は損なわれる危険性もあります。

その意味でもすべての分野で直ちに導入していくことへの怖さがあり、人対人のような関係性を構築することへの不安感も拭えません。人類の進化の過程でAIの技術の進歩は避けては通れないことではありますが、その急激な変化に耐えられない・ついていけないという人も多いのではないのでしょうか。AI技術が人に代わり、作業を行うことで労働人口が減り、人が接触する機会が減れば、その間に生まれていた差別が減るようにも思えますが、AIと人の間では見えにくい新たな問題が生まれ、解決できない溝が生まれることも否定できません。技術の進歩は人類にとって大事ですが、それを理解し受け入れる人たちの気持ちも追いついていかないと、いずれどこかで、大きな歪が出るのではないかと危惧しています。

多くの人がそれぞれの価値観で生きている中で、多種多様なパターンがあり、今までのデータでの枠には収まらないこともあるので、AIだけでは人の微妙な表情の変化を読み取ることは難しく、その人が意図とは違う思いや表情をしているとして、汲み取ってしまうこともあると思います。すべての場面で的確な対応ができるようになるには、データや単純化した情報を基に、人の意識に近い形にできる技術があるとはいえ、回数を重ねて話をしながらつかみ取るということも大事です。人権問題において大切である「自分事として捉えてその人の立場に立つ」という表現をAIという技術の中に収めることがはたしてできるのでしょうか？やはり、人が経験・学習の中で得た正しい知識をアウトプットしていきながら、それを活かす環境が整ってこそ差別解消に向かうと思います。大切なのは、人の心です。AIが進化しても「人の心を動かすのは人の思いであり続ける」と私は思います。

